

# ユートピアと歴史

——現代を理解するための二つの視座——

塚 田 富 治

〔編集部注記〕

本稿は、塚田富治先生の遺稿である。以下にかかげる目次のプロローグおよびエピローグがそれである。1章から3章まではすでに『一橋論叢』などに発表されており、この遺稿をもって、「ユートピアと歴史」が完成することになる。遺稿は、ワープロでうちだされたものであるが、あきらかなタイプミス（助詞の重複など）は編集部の責任において訂正した。

## 目次

プロローグ

### 1章 ユートピアからの視座

1. 言語芸術作品としての『ユートピア』の背景
2. 大学のユートピア——もしくは大学の怪談
3. 「ユートピア」物語のすすめ

### 2章 歴史研究の方法——模索と冒険

1. 思想史研究以前
2. 思想史の方法をめぐる

### 3章 歴史からの視座

——初期近代の実像——

1. 初期「市民社会」考
2. 学長の独裁——オックスフォード大学の改革
3. 初期「嫌煙」論争

エピローグ

## プロローグ

現代とはどのような時代なのか。またわれわれが「今、生きている世界」はどんな世界なのか。この時代、この世界を特徴づける言葉は数多く存在する。急速に、しかも画一的な方向へと変化するグローバル化の波に呑み込まれつつある時代。多様な価値観や文化が地球規模で共存し、相互に影響しあう寛容で創造的な多文化主義の時代。任意に取り出した新聞や雑誌でしばしば目にする二つの例を挙げた瞬間に、読者は戸惑ってしまうだろう。この二つの特徴は対立しあうのではないかと。

筆者の関心に引き付けて、もう一つの例を挙げてみよう。17世紀のイギリスの哲学者フランシス・ベーコンを研究してきた筆者には、現代という時代が次のように見えてくる。ベーコンは、「古代」という言葉の意味を逆転させて、「現代」にこそ適用すべきであると示唆して、書いている。「世間では老成した人から、かれの経験やかれが見聞きし考察してきた多くの事柄ゆえに、事物についての深遠な知識や成熟した判断力を期待できる。それと同じように、世界がまだ若かった遠い過去の日々からよりも、今のこのわれわれの時代からはるかに大きなことが期待できる。なぜなら世界は老成し、測り知れないほどに経験や観察の貯えを増やしているからである」。ベーコンにとって17世紀は老成した「古代」と言うにふさわしい時代だった。

それからおよそ4世紀たった、21世紀からは、精神的あるいは知的な面で、ベーコンの時代よりもさらに一層深遠な知識や成熟した判断力が期待できるかもしれない。しかし21世紀の世界を人間にたとえてみると、肉体的には、それは寝たきり老人一歩手前の状態にあると言ってもおかしくない。21世紀の「古代」世界は、過去からの測り知れないほどの負の遺産を抱え込んでいるからである。たとえて言うならば、老人の身体が働き過ぎ遊び過ぎ、飲み過ぎ食べ過ぎ、喫煙、出産などによってボロボロになっているように、21世紀の世界は、たとえば青々房々と地上を覆っていた緑の森林の大半を失ってハゲ状になり、体内には大量無数の汚染物質を抱え込んでカサカサボロボロの状態になっているのではないかと。

17世紀の世界という身体はまだ若く、老成した知識によってますます元気に発展して行く可能性を秘めていた。すくなくとも哲学者ベーコンはそのように考えていた。しかし21世紀の世界という身体は、老化し若いころからの働き過ぎ遊び過ぎによってボロボロになった筆者の身体のように、豊かで尽きることのない可能性を持ち合わせてはいない。21世紀の一層深遠となった知識や成熟した判断力の課題は、寝たきり老人一歩手前の状態にある「古代」世界をどのように介護していくかと言うことにな

るのかもしれない。

もちろん、多くの事例に基づいているとは言え、このような現代に対する見方はあくまでも筆者の主観的な判断にすぎない。こうした判断を否定する事例を数多く示し、読者は現代とはこれまで存在しなかった新しいものを次から次へと産み出すことのできる「誕生の世紀」と言い切ることもできる。筆者のそれとは、正反対の現代像を描くことも可能なのである。

こうしたことが起こるのは、適切な判断基準、あるいは共通の思考の物差しがないことが一つの原因と考えられる。それが存在しないために、各人の判断は主観的となり、現代という時代について関心をもち、それを考察する人々間の対話を不可能にしてさえしまうのである。とはいえ、適切な判断基準や共通の思考の物差しを作り出すことは容易なことではない。それら自体、あるいはそれらを作り出す試み自体が主観的におこなわれ、互いの対話を拒むことが頻繁に起こりうるからである。

そうした困難さを自覚したうえで、筆者がこれから試みようとするのは、現代という時代、あるいは「今われわれが生きている世界」を、すくなくともそこから一定の距離を置いて考察し、そしてその固有性、他の時代や世界には見られない特徴を理解することを可能とするような物差しを提供することである。現代という時代、「われわれが今、生きているこの世界」を計測し、その特徴を浮かび上がらせることのできる物差しとは、「ユートピア」と「歴史」である。

まず「ユートピア」である。ユートピア Utopia という言葉は16世紀イングランドの人文主義者トマス・モアの造語であり、「どこにもない場所」を意味する。それはやがてモアがフィクションとして描いた理想的な社会像を反映して、「実現不可能な理想的な社会」という意味をもつようになった。しかしユートピアには、抑圧され虐げられた人々の解放と変革の願望、あるいは革命勢力に脅かされる人々の安定した秩序への願望が結び付けられ、政治世界でも重要な意味をもつようになる。

どのような階層、立場の人々によって構想されたものであれ、ユートピアは基本的に三つの要素によって特徴づけられる。すなわちユートピアは、①現実から空間的もしくは時間的に隔離された世界における、②一定の価値や原則に基づいて設立・統治される、③理想的な制度——統治機構から人々の日常生活にいたるまでの——をもつ社会として描かれる。具体的な例を挙げるならば、隔離性ゆえに現実に拘束されることなく構想された社会は、モアによる快樂主義哲学にもとづく共産制社会、ベイコンによる科学への信仰にもとづいて工学的に計画されたニュー・アトランティス、モリ

スによる芸術中心の農耕社会など、一定の価値や原理にもとづく極限化された理想状態をとる。

ユートピア思想の創造性はこれら三つの要素が不可分一体となって産み出される。それはまず現実とは隔絶された理想を提示することで、現実の状態をラディカルにとらえ直すきっかけを与える。制度や社会についてのユートピアをもつ人々は鮮明な比較の対象をもつことで、批判すべき、あるいは改革すべき現実をより良く洞察する。また理想的な制度は「今、ここに」ないより良き目標に向かっての願望、期待を人々のなかに産み出し、同時にその制度を支える価値や原則を説得的に伝えることで、改革のための方向付けをも与える。例えばモアの『ユートピア』について言うならば、共産制は公正と隣人愛の原則を、哲人王の支配は徳と知にもとづく統治の原則を示し、彼の時代の人々に隣人愛や徳と知にもとづく統治を実現するための改革へとうながすことができたのである。

このようなユートピア思想は、理想と現実を架橋する具体的な戦略の欠如や現実逃避的な傾向のために、批判的となることもある。しかし歴史上、ユートピア思想は理想に照らして現状を批判し、また変革のための一定の価値や原則を示すことを通じて、政治改革あるいは革命運動を支える役割をも果たしてきたのである。

以上のようにユートピアは定義されうるが、筆者が目するのユートピアが時間的にも空間的にも「今、ここにある世界」から隔絶されている制度や社会であるゆえに、かえって「今、ここにある世界」との鮮明な比較の対象となり、批判すべきあるいは改革すべき現実世界の理解を深化させる働きをすることである。理想的なユートピアの制度や慣行と、現実世界のそれらとはどう異なるのかが、比較の結果として浮き彫りにされ、人々はその異質性の中に「今、ここにある世界」の特徴をとらえることができる。

しかもユートピアは人文主義者モアや哲学者ペイコンのような知の達人によってしか、描き出されないというものでもない。人間や人間が作り出す社会への期待や願望をもち、自由な想像力をもつならば、ユートピアはどんな人によっても描き出すことができるものなのだ。自分がかかわり、また利害関係のある特定の制度や機関についてのユートピアの、もっと視野を広げて社会や国家全体についてのユートピアの構想。これらの構想は「ああしたい」「こうしたい」という健全な欲望をもち、「ああなればよい」「こうなればよい」という健全な願望を人並みにもっていれば、多少の知的努力を加えれば生まれてくるはずである。このようにしてできあがったユートピア像を比較の対象として、現実の制度や社会を見直すことで、われわれはそれまで、これとは

自覚することのなかった、今という時代、われわれが生きている現実の世界の特徴をより鮮明に理解することができるのである。

次に歴史である。人はどのような理由で歴史を読み、書くのであろうか。歴史小説から専門的な歴史研究書まで、書店にはかならず歴史書のコーナーがもうけられ、その時々注目される人物やテーマを対象とした作品が平積みされている。このことは多くの場合、歴史がその時々が抱える問題を解くための手掛かりを与えるものとして読まれ、そして書かれることを示している。歴史は「今、ここにある世界」が抱える問題を解決するために、役に立たなければならないのである。こうした考えは古典古代のギリシャや中国以来の歴史についての見方である。有用性に重点を置く歴史観の例として、筆者が専門としている初期近代のヨーロッパの思想家の歴史に対する見方を少し見てみよう。

16世紀の前半さまざまな問題を抱えて混沌とするイタリアのフィレンツェを舞台に政治家として活動したマキアヴェッリは『君主論』のなかで、歴史の研究が君主の統治にきわめて重要な役割を果たすと次のように述べる。「精神の訓練に関しては、君主は歴史書を読まねばならない。そしてその内に卓越した人物たちの行動を熟慮し、戦争の中でどのような方策を採ったかを見抜き、かれらの勝因と敗因とを精査して、後者を回避し前者を模倣できるように努めねばならない。そしてとりわけ、卓越した人物たちといえども、自分より以前に、賞賛された栄光を勝ちとった者がいれば、その人物の武勲や偉業をつねに座右の銘として模倣に努めたのであるから、それと同じようにしなければならない」。マキアヴェッリはその理由として「現在の出来事と過去の出来事を考察する者は誰もが容易に、あらゆる都市やあらゆる人々が同一の願望や同一の特性をもち」、そのことによって「過去の出来事をたんねんに検討する者は容易に未来の出来事を予見し」、「過去の人々が用いた救済策を未来の出来事に適用でき」、あるいは少なくとも「似たような先例から新しい救済策を打ち出しうる」ことを挙げる。

また冒頭にあげた近代国家の形成期のイングランドにおいて政治家としても活躍した哲学者ベイコンは、あらゆる知識のデータベースとしての歴史の重要性を強調する一方で、歴史が現実社会の問題を解決するための手引きとなり、教訓を与えるものとして、その実践的な有用性をも指摘する。「あらゆる著作形式のうちで、この仕事の処理という移り変わりやすい主題にもっとも適した著作の形式は、マキアヴェッリが統治のために選んだのが賢明であり、適切であったような形式、すなわち歴史あるいはは

実例をもとにした叙述である」。というのは「個々の事件から生き生きと、目の当たりに見えるように引き出された知識は、個々の状況に対応するための最善の方法を知っている。実例が主で議論が従である時のほうが、議論が主で実例が従であるときよりも、実践にはるかによく役立つ」からである。ペイコンには、マキアヴェッリと同様に、歴史が統治や実務の処理にもっとも役立つという歴史観があったのである。

こうした歴史観は現代にも受け継がれている。20世紀を代表する歴史家であるE・H・カーも、歴史が役に立つことを強調する。『歴史とは何か』のなかで、カーは「歴史家は過去の経験から、それも彼の手が届く限りの過去の経験から、合理的な説明や解釈の手に負えると認めた部分を取り出し、そこから行為の指針として役立つような結論を導き出すのです」と述べる。合理的に説明される原因は、「他の国々、他の時代、他の条件にも可能的に適用されえますので、有効な一般化を生み出し、したがって、そこから教訓がえられる」からである。

さらにカーは歴史哲学者バーリンの主張を取り入れ、より洗練された表現で歴史の有用性を説く。カーによれば、バーリンは「普遍的妥当性を要求するような体系的な方法や原理ばかりを大切に、もっとも役に立つものに逆らうのが失敗の源である」と述べ、歴史における判断の基準を、「普遍的妥当性を要求するような原理」ではなく「もっとも役に立つもの」においた。このバーリンの主張にたいして基本的な賛意をしめしたうえで、カーは、バーリンのように「もっとも役に立つもの」を短期的な限界内に閉じ込めるのではなく、歴史の進展の中で「もっとも役に立つもの」は変化し、かつては見落とされ無視されていたものが、状況の変化の中で「もっとも役に立つもの」となりうることを示唆する。カーにとって「過去に対する歴史家の解釈も、重要な者、意味あるものの選択も、新しいゴールがしだいに現れるに伴って進化して行く」からである。

実は以上のような歴史観とは異なる歴史観を筆者はもっている。実用的な問題解決の手引きとして歴史が役に立つことを筆者は否定しはしないが、筆者が強調したいのは、歴史が「今、ここにある世界」をよりよくより深く理解し、認識するために役立つという側面である。このことはカーによっても、次のように指摘されている。「歴史から学ぶというのは、けっしてただ一方的な過程ではありません。過去の光に照らして現在を学ぶというのは、現在の光に照らして過去を学ぶということも意味しています。歴史の機能は、過去と現在の相互関係を通して両者をさらに深く理解させようとする点にあるのです」(97)。

カーのこの指摘は、過去と現在の相互関係あるいは連続性を重要な前提としている。これに対して筆者が強調したいのは、過去と現在は断絶しており、それぞれはまったく異質であるという認識である。時間的にも空間的にも現在から遠く切り離された古典古代の社会や慣行、近代市民社会の形成期といわれる16・17世紀のヨーロッパの政治制度や政治思想、これらは現代とのつながりよりも、その距離性あるいは異質性に注目して見られるべきであろう。こうした観点からは、ローマのカエサルや女王エリザベス1世が成功のうちに発揮したリーダーシップを現代国家を舵取るために役立てようとする試みは、失敗に終わると言えるだろう。なぜなら、カエサルやエリザベスはおかれた状況、あるいは相手とした人々は現代の政治社会状況、そこで生きる人々とはまったく異質であり、それぞれが架橋しがたい固有性をもっているからである。

筆者がこうした歴史観をもつようになったのは、現在歴史研究の世界において、最も大きな影響力をもつ研究者の一人であるQ・スキナーとの出会いである。スキナーが関心をもつのは、それぞれの時代や社会が抱える固有の問題に、固有の意図をもった思想家が、固有の社会的あるいは思想的なコンテキストの中で取り組み、そして固有の解決を与えたという事実であった。問題や解決の普遍性よりも、むしろその固有性を強調するスキナーの思想史研究は、古典的テキストの中に「時代を超越した問いと答え」を探り、「永遠の関心」を引くような普遍的命題を見付け出すことを至上命令とする人々にとっては、いかなる哲学的意味ももたないものとして、批判の大コーラスを生み出した。

これに対するスキナーの次のような反論に、筆者は強い影響を受けたのである。「古典的テキストが、なにか訳の分からない理由からしてわれわれ自身の問題ともかかわっている、などという憶測ではなく、それらがわれわれとはまったく異質のそれ自体の問題とかかわっている、というまさにその事実こそ、わたしから見れば、思想史研究の本質的な意義に疑念を投げ掛けるどころか、むしろそれを明らかにする鍵を与えるものと思われる」。この異質なものを鏡とすることによって、われわれはわれわれ自身についての一般的な真理を発見でき、しかも社会がそれとは自覚されないままに課している拘束からわれわれを自由にしてくれる。スキナーにとっての歴史研究の哲学的意味は、「歴史から粗雑な教訓を拾い出す」ことにはなく、「歴史自体が自己認識における教訓を提供する」ことにあるのである。

過去の社会や出来事は、ユートピアの制度や慣行と同じように、現実社会、今という時代とは掛け離れているのである。しかしそうした距離性、異質性こそ、「今、ここ

にある世界」の特徴を浮き彫りにし、より深く理解する手掛かりを与える。まったく異質のものであることで、過去は鏡となって「今、ここにある世界」の特徴をくっきりと映し出すのである。もちろんそのために、歴史という鏡は、現代という時代が吐き出す妖気によって曇らされても歪められてもならない。後で詳しく述べるように、現代を理解するための歴史は厳密な過去の再現でなければならないのである。

以上のように「今、ここにある世界」に対する見方、そして「ユートピア」と「歴史」に対する見方を180度転換することで、われわれはそれとはなしに気づいてはいたものの、明確にそして自覚的に把握できなかった「今、ここにある世界」像を浮き彫りにする可能性を手にするであろう。本論で展開される議論は、そのための手助けとなることを意図したものである。



## エピローグ

現在、政治改革、経済構造改革の気運が高まるなかで、将来のこの国についてのさまざまな構想が、政府や政党、民間の研究機関、そして知の世界で活動する人々などから提示されている。国民によって直接選ばれた国の最高指導者がリーダーシップを発揮できる政治、廃棄物の徹底したリサイクルによる、経済成長や雇用の創出も可能となるゴミ・ゼロ社会、老人や障害者そして女性など社会的弱者と呼ばれてきた人々にも優しいバリアフリーの社会などなど。われわれは「今、ここにあるニッポンという世界」が目指すべきユートピア的な未来像を数多く示されている。しかしこうした未来像の多くは、たとえば選挙の時期に有権者の一時的な関心を引くために提供され、その目的を果たし終えれば使い捨てられることがしばしばであった。また企業が提供するバラ色の未来像も、移ろいやすい時代の流れに迎合し、消費者の財布の紐をゆるめることを主要な目的とするものであった。かくして未来像を提供される側も、それらの実現が真剣かつ誠実に追求されることなく消えて行くという経験を重ねることで、それらを材料として真剣に自分たちの将来について検討することもなくなっていった。

しかし言語芸術作品としてのユートピアとはけっして言えないようなこうした未来像も、使いようによっては「今、ここにある世界」を相対化し、そこから距離をおいて見つめ直すきっかけとなる。経済成長の誘因ともなり環境にも優しいゴミ・ゼロ社会の構築の提言は、はからずも家庭からのゴミや産業廃棄物によって生態系が破壊され、人間が人間らしく生きていくことのできる環境が日々消滅しているという現実を、より鮮明に衝撃的に理解するきっかけを与えてくれる。さらに良心的な民間団体や国際連合を中心とした国際機関などによって構想される望ましき未来世界像、あるいは逆に核爆弾や環境悪化による地球の破滅という最悪のシナリオも、ユートピアと同じような機能を持ち、「今、ここにある世界」をより深く理解するためのモデルとなるであろう。

党利、営利などを目的とした未来像から人類や地球そのものの存続を真剣に考えた未来像にいたるまで、われわれが注意深い批判的な読者であるならば、それらはユートピアと同じような働きをするにちがいない。さらにそうした未来像を下敷きにして、そこに読者の想像力と構想力によって、さらにまがい物を削除し、望ましいものを新たに付け加えていけば、本物のユートピアができあがるかもしれない。

これまでの叙述から読者も気づいたかもしれないが、筆者は「今、ここにある世界」「今、われわれが生活しているニッポンという社会」を相対化し、それらをより深く理

解できるような包括的なユートピアを描く能力はない。しかし現在を理解するための一つの視座として、「ユートピア」を論じてきた責任上、「今、ここにある世界」を抱える一つの問題を浮き彫りにできるような、より穏健な現実にもとづいた「ユートピア」を描いてみよう。想像力を駆使して大きなキャンバスに描かれたユートピアではないが、イングランドの中世から近代への移行期に生まれた深刻な諸問題を解決しようとしてモアが『ユートピア』第一巻のなかで、提示した現実主義的な改革案がそうであったように、筆者なりの現実主義的な改革案は、モアが述べるように、専門家や政治家から「大きな権威をもって大事が論じられている」場では、「問題にされる余地もなく」、わたし自身が「あざけりの的になる」ことを覚悟のうえである。

日本国憲法は、国民の基本的な人権として「健康で文化的な生活を送ることのできる」権利を定めている。どのような状況に直面しても、この権利の享受を持続できることが、ユートピアの最低条件である。現在、この国を世界経済の牽引者としての役割を再度担えるようにするための一大改革として、経済構造改革が唱えられている。これによってかなりの長期にわたってこの国は経済面、社会面、そして政治面でかつては見られなかったような停滞と混沌を経験することになるだろう。ユートピアを夢見るところではなくなるのである。しかしこうした時代にこそ、人間のもっとも基本的な願望が損なわれることのない社会を構想することが必要になる。快適な人間関係の中で、健康に学び働き、そして楽しい余暇を過ごす。おそらくこの国に生きる人々のほとんどが、こうした基本的な願望をもっているだろう。日本国憲法にしたがえば、それはまた国民の権利でもある。経済構造改革という大手術の痛みの中でも、こうした基本的な願望が実現される基盤が整えられていれば、人々は改革に伴う痛みを耐え、この国の再建に協力を惜しまないであろう。

そこで、もっとも重要なことは、働く意欲のある人々はだれでも仕事に就ける環境を整えることである。失業のない健全な社会が改革の大前提となる。そのためには仕事を分け合うこと、すなわちワーク・シェアを最重要課題として、その効率的な実現を目指すべきであろう。各人が仕事と報酬を減らすという痛みを分け合って、働く意欲と能力をもつ多くの人々がリストラされることなく、また失業状態から解放されて、働く喜びと一定の収入を確保できるようになるためである。何人分も仕事を独占している、あるいは負わされている有能な人々の収入は減るかもしれないが、雇用は安定し、全体としての国民所得も安定した状態を保つ。これが基本的人権として憲法のなかで保証された「健康で文化的な生活」を支える土台である。

さらに、これまで一人で独占していた仕事を分け合い協力して一つの仕事に取り組

むことになれば、より多くの知恵がそこに投入され、仕事をする場での人間関係も密度の濃いものとなるかもしれない。またこれまで自分だけが全責任を負って目一杯に行っていた仕事を他の人と分け合うことで、余暇が増加する。そうした時間は、人間が本来必要とするゆったりとした休息のために費やすことができる。またその時間は、ボランティア活動や大学院での研究に向けることで、有効に使えるはずである。モアの描くユートピアの市民が人生の幸福と考える「精神の自由と教養」を手にする機会が増加するのである。そればかりでなく、ボランティア活動によって社会のネットワークはより豊かで創造的なものとなり、大学院で学ぶ人々が増えれば、経済の成長をも可能とするような社会全体の知的水準や創造性の上昇も可能となるのである。

創造的で公正なワーク・シェアのシステムを作り出すこと一つだけでも、これだけの効果が期待できる。もちろんこうした構想にたいしては、より多くの収入、より多くの責任、より多くの企業内権力を求める有能な人々の競争意欲を削ぎ、競争によって生まれる経済的・社会的活力を減退させ、停滞した社会を生み出すという批判の大コーラスを喚起するだろう。そうした批判にはこう応えよう。「真に有能で社会を活性化し、社会に貢献できる人とは、一つの仕事にしがみついているような専門馬鹿ではない。人類に貢献するような業績を残した科学者、成功を収めた企業人、有能で活動的な大学人の多くは、自分の仕事場ばかりではなく、あるときには国際的な研究・教育機関のメンバーとして、政府の審議会の委員として活動し、またあるときにはボランティアとして、自己の能力を公共のためにも最大限活かそうとする。かれらは、自発的かつ創造的に、専門的な仕事に費やす時間を他者に任せ、ワーク・シェアを実行しているのである。こうした創造的人間たちが若い人々の人生設計を助けるひとつの競争のモデルとして受け入れられるような教育を施すならば、創造的競争へのインセンティブは衰えることはないだろう」。

しかし、あくまでもワーク・シェアに反対し、仕事を独り占めしたい人たちがいて、しかもかれらが仕事ができ有能であるならば、専門的な仕事を彼らに任せ、その成果に応じて報酬も定めたらよい。人間の能力や欲望にもおそらく有効期限のようなものがあるはずだから、それが過ぎたら、かれらにもワーク・シェアのグループに入ってもらえばよい。もし彼らの能力が持続することが証明されたら、彼らはエグゼクティブとして、ワーク・シェアを中核としたシステムのさらなる発展と運営をになってもらえばよい。

このようにワーク・シェアを土台として、しかも有能で仕事好きな人材は競争に参加し、その成果に応じて報酬も与えるというシステムを築くことで、安定した雇用と

競争原理をも取り入れた社会を構築できるはずである。ワーク・シェアの効率的なシステムの完成とワーク・シェアに適応できる人材の養成は、政府の関連省庁や大学の研究所などの公的機関を中心に進められるべきであろう。コンピューターの情報処理能力の格段の進歩によって、働く人々の能力や適性にあったワーク・シェア・グループへの配置を可能とするようなソフトも開発されるであろう。また新しい経営や先端技術を研究する大学院大学などの高等研究機関が続々と設立されていることも、新しいシステムの完成に向けての競争的なインセンティブを与えることになるであろう。

経済学の専門家でもない筆者でも、一定の願望と知識がありさえすれば、これだけのアイデアを提供できる。このアイデアでも、また別のもっと優れた魅力あるアイデアでもよいから、それを土台としてインターネットを通じて高等研究機関から現場で働く一仕事人にいたるまで、あらゆる階層、領域から英知を集め、アイデアをさらに包括的でかつ精緻なものとして行くことは、今では可能なはずである。経済学や経営学それに政治学の専門家から見れば、たわいもない現実味のない構想かも知れないが、これまでユートピアについて論じてきたことを考えて、あえて筆者なりの拙い説得力のないユートピア論を展開してしまった。あえて、繰り返すまでもないが、筆者の拙いユートピアを通して見えてくるのは、若くして働く意欲をもちながら就職できない高卒・大卒の若者たち、リストラの不安に脅えて落ち着いて仕事に専念できないサラリーマン、そして不幸にして職を失い能力を持て余しながら無為の日々を送る失業者、そうした人たちが着実に増加し、経済発展を妨げ、社会不安をも高めているという、この国のけっして明るくはない現実である。しかしユートピアへの冒険はこれくらいにして、厳密な過去の実像を求めるといふ歴史研究の冒険へと移ることにしよう。

歴史において「過去の実像」、あるいは「過去のある時期の本当の姿」といいかえてもよいが、それがより鮮明な輪郭をもつようにするために、現在と過去との断絶性と異質性を強調してきた。しかし、こうした議論が誤解を招くことがないよう、「今、ここにある世界」の特徴を理解するために役立つ「歴史」の意義を再確認する前に、過去と現在を通底するものがあることもまた、指摘しておく必要があるだろう。それがなければ、そもそも過去と現在を比較して、「今、ここにある世界」の特徴を浮き彫りにすることなどできないからである。

近代初期の市民社会も現代の市民社会も、すくなくともそれが「内戦状態にはない、人々の平和な交わり」という共通点をもつ。国王派と議会派がイングランド国民をも

巻き込んで戦闘をつづけていた時期の17世紀のイングランドにも、民族や人種間の紛争、内戦がつづく現代のバルカン地域やいくつかのアフリカの国々においては、市民社会 civil society は存在せず、そこにあるのは内戦 civil war 状態である。近代初期の大学改革も現代の大学改革も、最高の高等研究教育機関の現状を変えようとする点において共通点をもつ。そして16世紀のイングランドでも、現代のこの国においても、タバコという植物の葉を乾燥させ、そのエッセンスをさまざまな手法で楽しむことを「喫煙」と呼ぶことに変わりはない。

初期近代の政治と現代国家における政治を比較して、現代の政治の特徴を明らかにできるのも、「政治とは何か」について初期近代にも現代にも通底する基本的な理解があるからである。政治とは「可能な限り暴力や強権の行使を控えながら、人々をまとめ秩序を形成・維持していく活動」という点において、近代初期においても現代においても共通点を見ることができるのである。これにたいして16世紀のスコットランドで誕生したと言われる近代初期のゴルフと現在この国で人気を博している野球を比較しても、現代の野球の特徴を浮かび上がらせる効果はほとんどない。近代ゴルフと現代野球には、通底する共通点がほとんどないからである。

さて、ユートピアの構想とは異なり、過去の本当の姿を忠実に再現するという「過去の実像」の確立という作業は、容易なことではない。現代にかかわる問題意識に乗せられて、断片的な歴史の事実を恣意的に組み合わせていく作業とは異なり、過去を忠実かつ厳密に再現するには歴史研究者としての積み上げられた熟練を必要とするからである。多忙な読者にこうした作業を要求するのは苛酷であり、ないものねだりでもある。しかし幸いなことに、現在の歴史研究の世界においては、とりわけこの国の歴史にかんして、古代から近世にいたるまで、膨大な資料を丹念に読み、新しく発見された資料をも積極的に活用し、現代的な関心に歪められることのない、正確で限りなく忠実に過去のある時期の本当の姿な過去の事実の再現といえる作品が続々と生み出されている。

自国史と外国史研究の一つのちがいは、前者が方法論などほとんど気にする事なく、黙々と目の前にある豊富な資料に取り組むのにたいして、後者はかならずしも豊富でない手元にしかない資料をどのような方法によって処理しようかという考えに気をとられてしまうことである。この国の歴史に取り組む誠実で禁欲的な歴史研究者は、スキナーの方法に影響されたわけでもなく、新しく発見された資料、現代の問題を解決するためには役に立たないと打ち捨てられてきた資料をも検討の対象として、一面的ではない過去の忠実な再現に努めている。筆者はリヴィジョニストと呼ばれる、一群

の歴史研究者たちのことを指しているのではない。歴史をある政治的意図をもって修正しようとする限られた人々を除けば、真摯で誠実な歴史研究者たちは、スキナーの助言を待つまでもなく、資料を読みそこから「過去のある時期が具体的にどのようなものであり、なぜそうであったのかを活写する」過去の実像を再現しようとする作業のなかで、スキナー的な方法に従っているのである。

日本史研究においては、知的な廉恥心があれば、無視したり偽造したりできないほどに、厳密に検証され、公開された豊富な資料が手にできるからである。しかも、歴史が一国内だけでなく、複数の国々を含めたより広い地域、あるいは地球規模でのコンテキストのなかで語られ記述される現在、歴史的事実にかんする情報である資料は、多国間の協力で発掘、検証、そして共有されるものとなっている。このようにして集められた資料を省略したり無視したりする歴史記述は、欠落部分で虫食い状態になった過去像しか生み出せないのである。

われわれは少なくとも、この国の歴史にかんするかぎり、これまで以上に厳密に忠実に過去を再現した歴史研究の成果を享受できる幸福な状態にあるのである。

事実にかんする情報である資料が増加し、国際的な共有財産になることで、正確な過去の実像を再現できるというこのような楽観的な見通しにたいして、E・H・カーは、それを素朴な経験主義に依拠する19世紀末の実証主義者の考えであると冷や水を浴びせるかもしれない。『歴史とは何か』のなかで、カーは19世紀末の歴史編纂者の言葉を批判の対象としてつぎのように引用している。「19世紀が後代に伝えようとする知識を余すところなく記録し、これを申し分なく多くの人々に役立たせるのには、現在がまたとない好機であります。賢明な分業のお陰で私たちはそれができますのでありますし、この国際的研究が生んだ最も新しい文書その最も円熟した結論をすべての人々に知らせることができるのであります。現在、私たちは完全な歴史をもつに至ってはおりません。しかし、私たちは在来の紋切り型の歴史は片付けることができますし、また、一つの地点から他の地点に至る途上で私たちが現に到達している地点を申し上げることができます。今日では、どんな知識でも入手が可能ですし、どんな問題でも解決が可能となっているのですから」。

このような国際的な分業によって厳密に検証された資料のお蔭で、「本当の事実」からなる実証主義的な歴史が可能になるという楽観的な見通しにたいして、カーは、歴史的事実は歴史家、歴史研究者の選択によって存在すると述べ、たとえ「本当の事実」であっても、それらの集積だけでは「歴史」とはいえないと反論する。「歴史家は必然的に選択的なものであります。歴史家の解釈から独立に客観的に存在する歴史的事実

という堅い芯を信じるのは、前後顛倒の誤謬であります」。

こうした玄人受けするような批判にたいしては、次のような反論が可能であろう。21世紀の歴史研究の世界においては、あらゆる国のほとんどの歴史家、歴史研究者によって重要な事実として認められているような山のような「本当の事実」が存在する。それなしでは、それを無視しては、過去の正確な実像を再現できないような事実の集積である。それらは過去の実像を再現するときの、基礎的な資料、過去の実像の土台・骨格となるような事実である。そしてそれらの事実は、厳密な検証をへた「今、ここにある世界」をより深く理解することを可能とするような事実をも大量に含んでいる。

われわれは広く公開され、インターネットなどを通して容易にアクセスできるこうした膨大な「本当の事実」をもつことで、歴史研究者が恣意的に拾い集めてきた事実や新たに発見されたと主張される未検証の事実をもとにした新しい歴史を簡単に批判できる可能性をより多くもつようになっている。堅い芯となった大量の「歴史的事実」に取り囲まれているという意味において、19世紀末の歴史家とは比べ物にならないほどに、現在の歴史家は自由ではないのである。

しかし、「歴史的事実とは現代の問題の解決に役立つことを基準にして、歴史家によって選択された」事実であるという、カーの主張が受け入れられるならば、検証済みの本当の事実の宝庫から選び出されるのは、現代と共通点をもつような事実が大半となり、現代では想像力もおよばないような異質で、ある時代に固有の事実は無視されてしまう危険性が生まれるであろう。「古代中国に統一と平和をもたらした宰相のリーダーシップ」「19世紀英国の繁栄」「アウシヴィッツの悲劇」などをカーが主張する基準にしたがって歴史記述の対象とするとき、それらの包括的な実像が描き出される可能性は著しく少なくなる。それぞれの時代や場所がもつ固有性、現代とはかかわりのないような異質性を浮き彫りにするような事実の多くが、無視されてしまう危険性があるからである。大半が現代と似通った事実によって構成される歴史像は、どっしりとした安定した包括的な全体像ではなく、いくつもの欠落部分をもつ脆弱で不安定な歴史像になってしまうであろう。

筆者はカーとは異なり、検証済みの「本当の事実」の宝庫に眠っている、それぞれの時代、場所の固有性を浮き彫りにするような事実をより積極的に利用して、本当の事実から構成された過去の実像を描くことが、歴史家、歴史研究者のもっとも重要な課題の一つと考える。読者はそうした問題意識をもつ歴史研究者によって生み出された研究に接することで、過去と現在を見比べ、「今、ここにある世界」の特徴を理解で

きるようになるはずである。そして、そのときにはじめて「今、ここにある世界」が抱える問題の固有性を理解し、その問題に取り組むための固有の解決法の模索が可能となるのである。もちろん、「歴史的事実」の宝庫から、現代の問題の解決に役立つ情報を借り出すことは勝手であり、ときには大きな収穫をもたらすこともあるだろう。しかし、ともかくも最初にするべきことは、現代が抱える問題の特殊性、固有性を理解することであり、くりかえしになるが誠実な歴史研究者によって生み出される「過去の実像」は、現代との比較の対象となることで、そのための役割を果たしてくれるのである。